

— 福井市中心市街地活性化基本計画 —

賑わいのあるまちづくりを目指して

まちづくり福井株式会社 代表取締役社長 宮川 雅敏

はじめに

福井市は、日本列島のほぼ中央の日本海側に位置している。九頭竜川、足羽川、日野川の3大河川の扇状地にあり、明治22年の市制施行以来、福井県の政治、経済、文化の中心都市として発展を続けてきた。その間、昭和20年7月の空襲、昭和23年6月の福井大震災や度重なる風水害により壊滅的な打撃を受けたが、市民の不屈の精神によりよみがえり、今日の「不死鳥のまち福井」を築きあげました。

平成12年11月には特例市に移行、現在、人口約27万人となり、県内の人口の約33%を占め、福井県の県都として、また北陸の主要都市としてまちづくりが進められている。

福井のまちづくり

福井市のまちづくり基礎は天正三年（1575）の柴田勝家の北ノ庄城の築城や慶長5年（1600）の結城秀康の北ノ庄城（後の福井城）の再建によるものと言われる。これら歴史的背景は、戦災や震災等により消失したが、戦後の各種都市整備における基本的な都市構造に少なからず影響を与えている。

また、前述のとおり度重なる災害により市街地が壊滅的なダメージを受けたが、これらの災害を乗り越え、急速に近代的な都市づくりがすすめられた結果、福井市の中心市街地はJR福井駅前公共交通が結節し、県庁や市役所等の公共施設や商業、業務施設、まちのシンボルでもある足羽川や福井城跡、柴田神社などが集積したコンパクトなまちが実現した。1970年代入り、モータリゼーションの進展や環状道路の整備や土地区画整理事業等により、商業機能だけでなく公共施設等の郊外への流出が進み、中心市街地の空洞化が顕在化してきた。

こうして中心市街地が相対的に低下していく中、県都の玄関口として北陸新幹線の現駅併設やJR北陸線の高架化が打ち出され、1986年より「福井駅周辺整備構想」

に基づき、各種事業が推進されることになった。更にこれらと相まって、1999年には「福井市中心市街地活性化基本計画」が策定され、「出会い、暮らし、遊びが彩るまちづくり」の理念のもと「プラス1時間楽しむまち」を基本目標に再開発や賑わいの道などの基盤整備事業やコミュニティバスの運行のソフト事業など期間中に53の事業が計画され、そのうち45の事業が完了もしくは着手された。こうしたハード・ソフト事業の集中的な実施により、中心市街地の歩行者の減少傾向には歯止めがかかったが、中心市街地の年間小売販売額、事業所数、居住人口は減少し、その後もまちの賑わいが喪失し続けている。そのため、福井市では新中活法の新しいまちづくりの視点を加え、2007年11月に国の認定を受けた「福井市中心市街地活性化計画」に取り組むことになった。

まちづくり会社の設立

まちづくり福井は、旧法に基づき2000年2月に資本金5,750万円、株主120名により、第三セクター方式のTMOとして設立された。出資構成は福井市が3000万円と51%を超すが、株主構成では地元中小企業が112社の80%を占め、各種事業が行政と地域が一体となって推進される態勢が整えられた。

旧計画時はTMO構想に基づき事業が展開され、主だったものとしては、まちなかの文化発信基地「響のホール」の建設や地元商店街と一体となったアーケード建設等のハード事業からコミュニティバス「すまいる」の運行や賑わい創出事業などのソフト事業まで幅広く展開された。新計画では、TMOという法的位置づけはなくなったが、福井市中心市街地活性化協議会の主たる構成員として、事業を実施している。事業としては、福井市からの補助や委託事業割合が約6割を占めるが、まちなかポータルサイト「A.S.B net (アソビねっ)」の立ち上げや電子マネー「ICOUSA」の導入、空き店舗集積地を商業+地域コミュニティの場とした「新築スクエア」事業などの独自の事業も展開している。事業のスタンスと

しては、まちづくりの関する情報交流拠点としての確立や活性化基本計画に入らなかった民間の事業シーズの発掘・支援を行う“まちの仕掛け人”を目指している。



【響のホール】



【電車通りにかかるアーケード】



【コミュニティバスすまいる】

福井市中心市街地活性化基本計画の概要

基本的には、1999年から取り組んできた「出会い、暮らし、遊びが彩るまちづくり」理念や基本的な方針を踏襲するとともに、交通や居住などの新しい視点を導入し、活性化に取り組む。

1. 計画期間

2007年11月～2013年3月（5年5ヶ月）

2. 区域

前計画と同様のJR福井駅周辺西側の市街地を中心とした区域（約105ha）

3. 目標と主な事業

目標1 訪れやすい環境をつくる（出会い）

JRやえちぜん鉄道など多様な公共交通が集まっている特性を活かし、更なる利便性の向上や結節機能の強化を図ることにより、誰もが訪れやすい環境をつくる。

○主な事業

- ・ 福井駅西口地区第1種市街地再開発事業
- ・ えちぜん鉄道三国芦原線のLRT化
- ・ 福井駅周辺土地区画整理事業（西口、東駅前広場）
- ・ 幸橋整備事業
- ・ コミュニティバス事業
- ・ 県都活性化税制

目標2 居住する人を増やす（暮らし）

新たな都心居住のニーズに対応し、中心市街地の特性を活かした居住環境を提供することによって、人口の増加を図っていく。

○主な事業

- ・ 優良建築物等整備事業（中央1丁目、3丁目、大手2丁目）
- ・ ウララまちなか住まい事業

目標3 歩いてみたくなる魅力を高める（遊び）

拠点となる商業施設や文化施設が立地集積している歩行者導線軸上の賑わいを重点的に創出し、その効果を全体に波及させていく。

○主な事業

- ・ さくらの小路・浜町通り界限整備事業
- ・ 浜町おもてなし空間づくり事業
- ・ 賑わい創出事業
- ・ 賑わいづくり支援事業
- ・ 御廊下橋復元整備事業
- ・ 子ども一時預かりセンター事業

- ・フェニックス祭り
- ・時代行列
- ・夜景を活かした魅力あるまちづくり事業

以上のように、従来からの取り組みに加え、県都の玄関口にふさわしい「賑わい交流拠点」を形成する福井駅西口の再開発事業や公共交通の結節強化を図る駅前広場の整備、居住する人を増やすための共同住宅建設事業、そして浜町通り界隈の歴史的景観整備等の新しい視点を加え、活性化を図っていくこととなった。

今後の取り組み

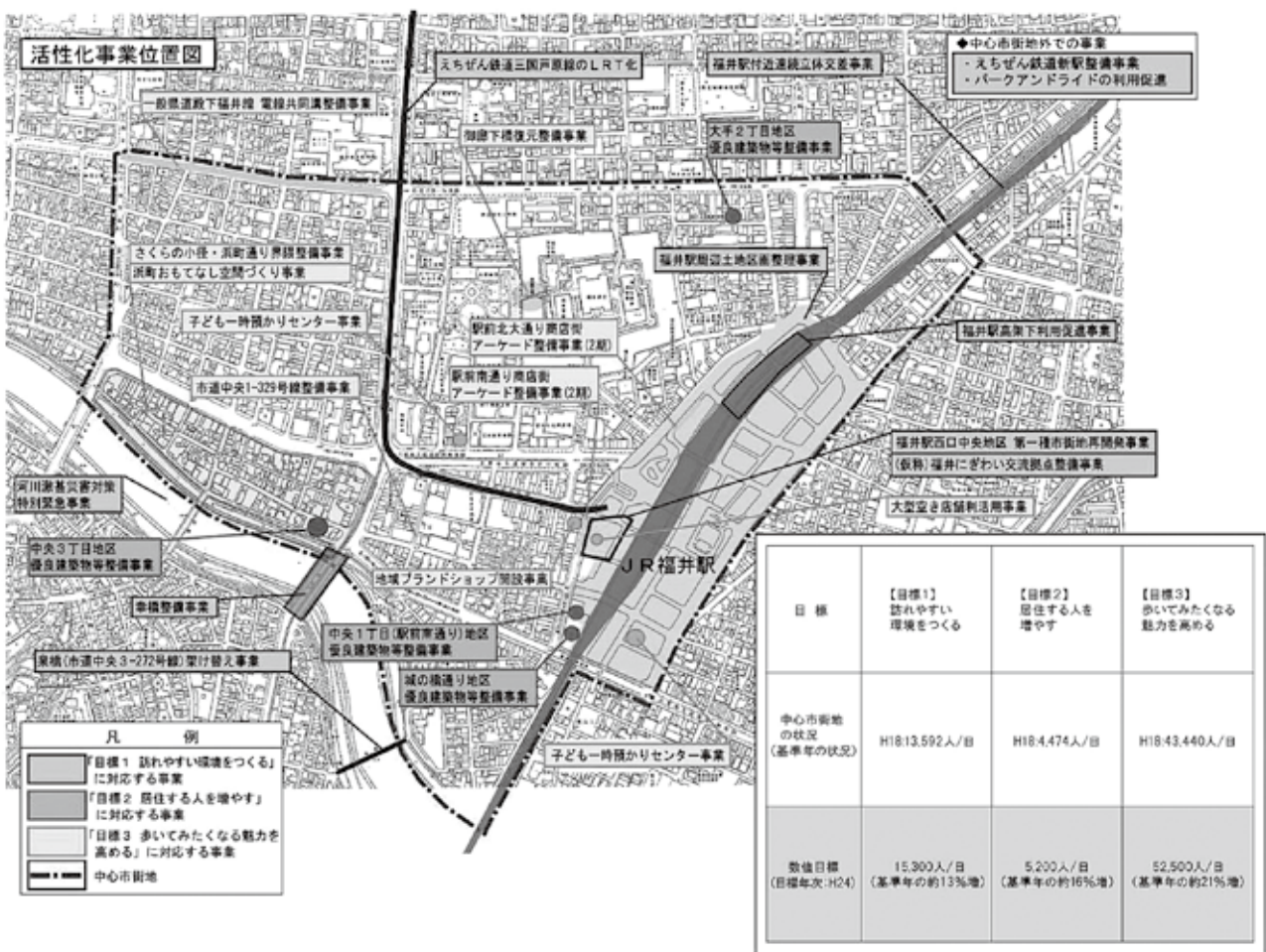
福井市の中心市街地は、昨今の景気低迷や北陸新幹線の本県への延伸が不透明なことなどもあり、西口再開発事業などのメインプロジェクトも停滞しており、閉塞感が蔓延している。従って、基本計画の数値目標の達成についても、極めて厳しい状況となってきている。

また、弊社が本年5月に実施した「中心市街地活性化

に関する調査」では、計画実施年と比較して「活性化している」と回答したのは僅か23%に止まっている。弊社では、これらの調査や地域との意見交換を踏まえ「福井市中心市街地活性化基本計画の再構築に向けて」を取りまとめ、早期の再構築を提言している。今回浮かび上がってきた課題としては、ハード面の開発や交通体系の整備は必要であるが、あくまでも手段であり、そのことだけでは活性化は図れない。やはり商業などのまちなか産業の活性化などによる中心市街地へ行く「コト」づくりが不可欠であるということであった。

ここにきて、福井市から懸案であった西口再開発事業の具体案が示されたことや、県と市が一体となって「県都のグランドデザイン」の作成に向けて動き始めた。これを機に、再度まちづくりに対する機運が盛り上がりとともに、住民本位のまちづくりが推進されることを期待している。

(みやがわ まさとし)



【福井市中心市街地活性化基本計画 事業位置図】